異質国家日本の戦略

新しい国際関係とこれからの安全保障とは

坂梨靖彦

PHP研究所

112
F713
119

新しい国際関係とこれからの安全保障とは

異質国家日本の戦略

坂梨靖彦

PHP研究所

〈著者略歴〉
坂梨靖彦（さかなし　やすひこ）
大正10年（1921）福岡県大牟田市生まれ。昭和17年京都帝国大学法学部入学。在学中、約2年間に渡って陸軍に入隊（復員時陸軍主計少尉）。昭和21年卒業後、企業経営を経て、昭和25年警察予備隊に入隊。昭和29年航空自衛隊に転換、その後航空団の隊長、航空総隊など上級司令部の高級幕僚、航空幕僚監部の班長、補給本部・補給処などの部課長を歴任。防衛研修所研究員として、安全保障問題の研究を続ける。昭和49年航空自衛隊を退職（最終階級空将補）。各種企業の管理職、顧問、米国企業の支配人を経て、現在、石油荷役㈱勤務に至る。
著書に『生存と繁栄を求めて』、『防衛改革』がある。

異質国家・日本の戦略
新しい国際関係とこれからの安全保障とは

1990年8月31日　第1版第1刷発行

著者　坂梨靖彦
発行者　江口克彦
発行所　PHP研究所
東京本部　03-239-6221
〒102　千代田区三番町3番地10
京都本部　075-681-4431
〒601　京都市南区西九条北ノ内町11
組版　株式会社ギャルド
印刷所
製本所　大日本印刷株式会社

©Yasuhiko Sakanashi 1990 Printed in Japan
落丁・乱丁本の場合はお取り替えいたします。
ISBN4-569-52851-1

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

はじめに

現在は米ソの二極構造が崩れ、ヤルタ体制がまさに終わりを告げようとする激動の時代である。すなわち戦後、政治・軍事・経済力に圧倒的強大を誇ったアメリカは、貿易財政赤字に悩み世界の警察官としての地位が重荷になっており、一方米国に対抗して強引に軍事力を増強して西側諸国に脅威を与えていたソ連は、その経済は不振を極め、国民の消費生活は先進国というには程遠い。また、ソ連国内の少数民族の不満はつのり、東欧諸国のソ連離れも著しいため、共産党独裁体制は崩れ去り、ソ連邦自体の解体さえも予想される状態である。

一方、第二次大戦における敗戦国日本の現状は、経済面から見ると敗戦のショックから完全に立ち直り、世界的に経済大国の名をほしいままにし、かつての戦勝国アメリカにさえ脅威を与え、このために米国の日本叩きの原因を作っている。しかし日本は国際政治面から見ると、軍事力が経済力に比較して著しく欠如しているため、米ソ両超大国はもちろん、英、仏、中国等に比較しても、はるかに国際的影響力の弱い、米国追随型の極めて異色の国家である。今後の激動する時代に、米国の圧力に耐えながら、国際社会に独立して生存してゆくには極めて問題の多い国

家である。

ところで現在の国際政治は、先進国間においては、軍事的に緊張緩和の方向に向かっていることは事実であるが、しかし国際間の安全保障体制はいまだ確立されておらず、世界的に戦乱の治まった時期はないので、やはり極めて不確定な時代であり、国家の安全保障は軍事力を抜きにしては考えられないのが一般的常識である。

しかしわが国の文化人の中には国際政治の現状を見て、軍事力による対決の時代は既に終わり、世界的に戦争のない時代が今にも到来すると考え、円高による日本の防衛費の見かけの膨張が、ただちに日本の軍事大国化に繋がるような錯覚を持つ者があると同時に、一方では米国の日本叩きに反発して、『「NO」と言える日本』という著書を著して、国民のナショナリズムを刺激し、いたずらに米国の反発を買うような政治家があることは、誠に危険な傾向である。

日本は先の大戦で、世界の大勢を認識せず、八紘一宇、大東亜共栄圏の建設等と独りよがりの幻想を追って、国家滅亡の危機にまで自らを追い込んだのであるが、現在は経済繁栄に現(うつつ)を抜かし、かつての超大国米国の経済的苦悩や、屈折した心情を思いやることなく、自らの利益のみを追求しているが、これは誠に遺憾なことである。

このような日本人の安全保障問題に対する無知と無関心は、戦前の日本が軍拡主義をとって身を滅ぼす羽目になったのとは、また別の意味での不安要因であり、この状態で推移すると、日本の安全保障上取り返しのつかない状態を招くことになると思うのである。

したがってこのような状態は当然改善されなければならないが、それには日本国民全体が国際政治の現実と安全保障の論理を理解し、日本としての合理的世界戦略のもとに、適切な対策をとる必要がある。

しかし現在の日本は、政治家は政争に明け暮れ、自らの得票のみに関心があるため、身近な税制や汚職の追及問題にのみ専心し、目前の米国の経済的要求に対応するのが精一杯で、長期的な国家の政策についてはほとんど関心がなく、最も大切な国家の安全保障問題に至っては、戦略的にも戦術的にもまったく研究しようとする姿勢がない。またジャーナリズムにおいても、長期的視野に立った国益に関する観念に欠け、発行部数、視聴率等にだけ関心を持つため、外交や安全保障問題については、一般的な事実の報道と、建前としての国際正義や平和愛好の理想だけは論ずるが、何ら建設的な本音の提案を行なっていない。

本書の刊行はこのような状態を改善し、国民が国際政治の現実を認識し、日本の対応のあり方を考えてもらうようにするための試みであるので、本書が日本の安全保障問題の対応にいくらかでも貢献できれば幸いである。

平成二年八月

著　者

異質国家・日本の戦略　目次

はじめに

第一部　激動の時代における日本の世界戦略

第1章　大変革の国際情勢を読む

1　戦後の国際情勢の潮流と最近の動向　15
　戦後の米ソ二超大国の推移／ヨーロッパ・アジアの情勢
2　米ソの衰退による多極化構造時代の到来　21
　世界的な影響力を持つ国家とは
3　軍縮の行方と第三世界国家群の核武装　23
　世界的緊張緩和時代の幻想
4　世界的安全保障条約の強化が歴史の流れ　27
　世界国家の誕生前に成すべきこと

第2章　国際政治の不安要因とは――29
1　東西対立終焉後の共産主義体制に残る内部的混乱　29
資本主義国家と社会主義国家のメリット・デメリット
2　第三世界の抱える三つの問題　33
第三世界国家の出現と先進国の思惑／第三世界の問題点
3　核兵器の世界拡散が人類に与える恐怖　39
そこに核兵器が存在する限り……
4　文明社会のもたらす地球的規模の環境破壊　41
公害問題の焦点
第3章　世界の安全保障施策の不安定な現状――43
1　国際法の認める個別の安全保障とその戦争抑止力　43
国際法の効用
2　大国の利害に左右される国際連合と日本の立場　46
国際連合の実態
3　集団安全保障機構と非同盟・中立路線の分かれ目　48
日本は非同盟・中立路線をとれるのか

4 進展が予想される東西両陣営間の軍備管理、軍縮交渉 51
困難な軍事力依存体制からの脱却

第4章 なぜ米国は日本を叩くのか ―― 54

1 第二次大戦後の米国の対日戦略 54
米国の日本弱化政策と日本育成政策

2 日本の経済発展と米国のいらだち 58
米国の経済不振の原因とは

3 米国に根強い日本人に対する偏見 60
なぜ日本は経済大国となり得たのか

4 米国の圧迫と日本の度を過ぎた反発の危険性 63
世界情勢に対する大局的視点が肝心

第5章 非核経済大国・日本の実態とこれからのあり方 ―― 69

1 日本の経済体質の脆弱性 69
日本の経済力に対する不安

2 日本の軍事力は世界第三位という錯覚 71
軍事力は予算額と比例しない／日本は侵略国家になり得ない

3 経済力を過信し、簡単に「NO」とは言えない 75
国際政治における発言力は何に裏打ちされるのか
4 日米構造協議で求められる自主的な社会構造の転換 79
最も重要な同盟国にはっきりと「YES」を
第6章 異質国家・日本の戦略はどうあるべきか 83
1 日本の安全保障に関係の深い近隣諸国の状況 83
米ソ間の戦略的な対立状況／米国の世界戦略と対日戦略／ソ連の世界戦略と対日戦略／中国の世界戦略と対日戦略／韓国の世界戦略と対日戦略／北朝鮮の世界戦略と対日戦略
2 非核経済大国の世界戦略 91
これから日本が取るべき世界戦略とは／軽武装、経済優先戦略を継続する必要性／全方位外交と第三世界援助の重要性／地球環境改善問題への取り組み／発展途上国政策で世界への貢献をはかる／異質国家の国際化の推進
3 非核中級軍事国家の安全保障戦略 102
忘れてはならない日本の経済繁栄の理由／日米安全保障条約の意義／日米安保のメリット・デメリット再考／日米安保、これからの問題点

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4 志願隊員制海洋国家の防衛戦略 114
国土防衛体制は最小の人員で最大効果を／対ソ防衛戦略に関する陸海空三自衛隊の構想のズレ／真の専守防衛体制とは

第二部 安全保障政策とは何か

125

第1章 安全保障政策立案の基本指針

1 安全保障の基本原理はどこにあるのか 125
「いかにしたら生存競争に敗れず、自己保存できるか」
2 国家の安全保障政策を考える 128
安全保障の語源／何を守るのか（安全保障の対象）／何から守るのか（脅威の対象）／いかにして守るか（政策の対象）
3 国家目標を決定する 133
国家目標とはいかにあるべきか
4 安全保障に関する積極政策、消極政策 135
大まかな安全保障の分類

第2章　安全保障政策が求めるもの――140
1　外交政策について　140
国際正義の必要性、一貫性、柔軟性
2　軍事政策について　142
3　治安政策について　142
国民思想の健全な指導と警察による治安維持
4　経済政策について　143
食糧・燃料等の自給率、一般経済力の引き上げ
第3章　軍事（防衛）政策について――146
1　軍事戦略の基本構想　146
仮想敵国に対する専守防衛戦略
2　軍事力の整備計画の内容　148
国家財政を考慮した現実的な計画を
3　民主主義国家における軍事政策の考え方　149
経済性、効率性の重視／国際的な政治的配慮／個人の生命財産の尊重

第4章　安全保障問題の歴史的考察――155
1　歴史を研究する意義　155
昔も今も安全保障が第一の課題
2　国際関係の通則を押さえる　156
国際社会の生存競争／大国の覇権主義と小国の生存の知恵／国際社会の集合性と分散性の原理
3　国家の命運を左右する要素　162
国民のバイタリティ／政権担当者の政策の妥当性／国家目標における正義のあり方／世界史の流れと国家の運、不運
4　安全保障に関する歴史的教訓　170
一般的事項／政治関係事項／外交関係事項／経済関係事項／軍事関係事項／科学関係事項／宗教・文化関係事項／思想・革命関係事項

第三部　日本の安全保障政策への提言

第1章　安全保障の全体的な考え方――181
1　前提――国内外情勢の予測　181
これからの国際情勢／これからの国内情勢／戦争の可能性とこれから

の世界的自然環境
2 これまでの継続が好ましい政策 185
国家目標／外交政策の基本方針／国内の安全保障政策
3 新時代に対応すべき政策 188
新しい外交政策の推進／防衛政策の今後／その他の諸政策
第2章 日本の防衛政策のあり方 192
1 保有すべき防衛戦力 192
「限定的、小規模侵略」に堪え得る戦略を
2 防衛力整備の基本方針 195
国際世論に対する政治的配慮／経済性、効率性引き上げの追求／有事即応体制の確立と戦闘継続能力の向上／人員の合理化と自衛隊定員増加の抑制／人命の尊重と軍事的環境破壊の防止
3 防衛上の問題点と防衛力整備の優先順位 198
憲法第九条を含む法制上の問題／陸海空三自衛隊の意思統一／基地取得、建設の困難／予備戦力の絶対的不足／重要基地の無防備さ／弾薬備蓄量の不足／優先実施の望まれる防衛力整備

4 防衛体制合理化の検討 207
隊員募集、予算獲得など重大な課題／大幅な機械化、省力化の推進／陸海空三自衛隊の後方部門の統合／後方部門の大幅な民営化
5 在日米軍縮小撤退への対応 212
予想される米軍の海外基地縮小撤退／具体的な対応
6 安全保障問題臨時審議会設置の提案 218
野党も含めた広範な検討を
おわりに

第一部　激動の時代における日本の世界戦略

現在の国際情勢は米ソ二極構造が崩れ、特に東欧、ソ連情勢は極めて流動的な状態にある。

第一部は、国際政治の現状と将来を正確に見通し、この中において国際的にやや異常と思われている日本の立場を的確に把握することにより、今後の日本の安全保障戦略のあり方を探るものである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com